

資料紹介

## 御用日記に残る定時法での時刻記述について

中村 賢\*

はじめに

1. 定時法で記述された箇所
2. 1864(元治元)年4月19~23日 京都から福井への移動の時間経過
3. その他の京都-福井間移動の事例
  - (1) 京都から福井への移動
  - (2) 福井から京都への移動

まとめにかえて

はじめに

「御側向頭取御用日記」<sup>1)</sup>(以下、御用日記)は、福井藩の側向頭取が記した松平春嶽の身辺記録である。そこには起床から食事、家臣や他藩の要人などの面会および贈答の内容、就寝に至るまでの記録が時系列で記され、春嶽の日常生活をこと細かに読み取ることができる。記述は、1859(安政6)年1月から1868(明治元)年7月までだが、その時期の時刻制度は天保暦<sup>2)</sup>であるため、御用日記の時刻の記述は、「六時(むつどき)」「五時(いつつどき)」といったいわゆる不定時法<sup>3)</sup>が基本的な形である。しかし、一部に現代の時刻にも通じるような定時法<sup>4)</sup>での記述(例、〇時〇分)が見られる箇所もある。

開国以後、西洋の機械時計の輸入が多くなったり、西洋人との交渉が増えたりしたことで徐々に定時法が浸透していく<sup>5)</sup>。当の春嶽本人も舶来の機械時計を所有している<sup>6)</sup>、御用日記に定時法の記述が登場しても不思議はない。時刻制度は、最終的には1873(明治6)年の太陽暦への改暦の際に定時法が採用<sup>7)</sup>され、現代の時刻制度の基礎が築かれることになるが、御用日記における定時法による記述は、不定時法から定時法への過渡期の事例として大変興味深い。

本稿では御用日記の中の定時法での記述箇所に注目し、時間経過からわかる春嶽一行の行動の特徴を探ってみたい。なお、時間経過の流れを把握する目的で不定時法の時刻の一部を現代時刻へと変換し補足したが<sup>8)</sup>、あくまで参考程度に留めていただきたいと思います。

### 1. 定時法で記述された箇所

表1は御用日記の中で、定時法での記述と考えられる箇所をまとめたものである。事例1(1864(元

---

\*福井県文書館企画主査

表1 御用日記で定時法での記述が見られる箇所

事例	年	月日	内容	備考
1	1864(元治元)	4月19～23日	京都→福井の移動	
2		7月22～24日	三国への周遊	「観海日志」にも定時法での記述あり
3	1865(慶応元)	10月1日	福井→今庄の移動	「間安行記」にも定時法での記述あり(但し、こちらは2日についても定時法での記述あり)
4		10月3日	今庄→福井の移動	
5		6月25～29日	福井→京都の移動	「西上日記」にも定時法での記述あり
6		7月17～18日	京都→大坂の移動	「難波日記」にも定時法での記述あり
7		7月25～26日	大坂→京都の移動	「溯澁紀行」にも定時法での記述あり
8		1866(慶応2)	8月23日	京都→大坂の移動
9		8月24日	大坂滞在中	“御出門正午十分時、御帰五字”、“御夜詰引 八字十五分時”
10		8月25日	大坂→京都の移動	
11		10月1～6日	京都→福井の移動	
12	1867(慶応3)	8月6～9日	京都→福井の移動	
13		11月2～8日	福井→京都の移動	
14		12月25～26日	京都→大坂の移動	
15		12月26～29日	大坂滞在中	“御夜詰引十一字五十五分”(27日)、“御出殿(門)”、“御帰殿(館)”が定時法での記述(26～29日)
16		12月29～30日	大坂→京都の移動	
17	1868(明治元)	4月4～5日	京都→大坂の移動	
18		4月5～6日	大坂滞在中	“御出殿十一字九分、御帰殿三字十二分”(5日)、“…九字三十四分時御一同御退散二相成候”(5日)、“御目覚五時三十分”(6日)など
19		4月6～7日	大坂→京都の移動	
20		閏4月12日～	京都滞在中	“御締切御寝御夜詰引十二字” この日以降、御夜詰引が定時法での記述
21		閏4月13日～	京都滞在中	“御出殿九字十五分 御帰殿七字前五分時” この日以降、御出殿・御帰殿が定時法での表記

治元)年4月19～23日の京都から福井への移動)をはじめとして、数日間に及ぶ移動のときに定時法での記述が目立つ。但しその移動中の全ての事柄において定時法で記述されているわけではなく、不定時法での記述もあわせて利用されている場合が多い。例えば御目覚、御供揃などは不定時法で記述されている。また、事例3、4(1865(慶応元)年10月1日～3日にかけての福井-今庄間の往復<sup>9)</sup>)については、1日と3日は定時法で記述されているが、2日は一日中今庄宿に滞在<sup>10)</sup>しており、不定時法での記述となっている。移動中であっても、不定時法の時刻を知る方法(時鐘や和時計など)がある場合は、そちらを優先したということだろうか。

事例2(1865(慶応元)年7月22～24日の三国への周遊)のように比較的近距離の移動においても定時法で記述されているケースもある。しかし、同じような越前国内の移動であっても、これにあてはまらないケースもある。例えば春嶽は茸狩や鷹狩目的でよく東郷筋へと出かけているが<sup>11)</sup>、このケースでの定時法の記述はひとつも見られない。

事例20(1868(明治元)年4月12日)以降は、移動中以外の日常的な事項(御夜詰引、御出殿、御帰殿)や面会の記録なども定時法で記述されるようになり、徐々にではあるが定時法利用が浸透している様子が窺える。なお、当時西洋の時刻制度の理解および使用が進むにつれて、定時法で記述する場合は、第一字時とか第二字時(あるいは略して第一字、第二字)と記述されたようであるが<sup>12)</sup>、御

用日記では定時法での記述は、当初不定時法と変わらず“時”と記述されていることが多い。その後、慶応元年頃を境に徐々に不定時法は“時”、定時法は“字”という使い分けがなされている。

1862(文久2)年の赦免以降、政治の表舞台に戻った春嶽は、1867(慶応3)年までに、江戸から京都、そして京都と越前の往復といった複数回の遠距離移動を行っている。表1でいうと事例1、5、11～13が該当する。御用日記に移動の記述がないものについても、その他の資料から定時法での記述が確認できる場合もある<sup>13)</sup>。これらのことから少なくとも1864(元治元)年以降は、春嶽自身あるいは御用日記を記した側頭取が定時法での時刻を知り得る環境にあったと考えてよい。また、御用日記だけでなく春嶽自身の日記(「観海日志」<sup>14)</sup>や「間安行記」<sup>15)</sup>などにも定時法で記述されているケース(事例2～7)があるが、そこで記述されている時刻は、御用日記で記述されたものと一致している場合が多いため、同一の時計を元に記述していたという推論も成り立つ。

では次に、事例1から春嶽一行の京都から福井への移動の時間経過を具体的に追いかけてみよう。

## 2. 1864(元治元)年4月19～23日 京都から福井への移動の時間経過

表2は、事例1の時間経過を示したものである。翻刻については本稿後半部分を参照されたい。時刻については、定時法の記述は算用数字で、不定時法の記述は漢数字で表し、現代時刻を括弧書きで補った。場所については基本的に原文に即して記述した。

先述したように不定時法と定時法が入り混じっており、御目覚や御供揃は不定時法によって記述されている。御発駕については19日のみ不定時法で、あとの4日間については定時法での記述である。その後、日中の移動から小休、御昼休、宿入および御夜詰引までが定時法で記述されている。宿入後の行動(御湯浴、御膳など)は時刻の記述そのものがない。なお23日の着城後は、不定時法での記述に戻っている。

定時法での記述を中心に春嶽一行のタイムスケジュールを概観しよう。毎朝、御目覚、御供揃を経て岡崎屋敷(および宿泊した本陣)を出発となる。出発時間は、19日は午前5時30分頃、20～22日については午前4時代、23日については午前2時45分と徐々に早まっている。日中は、移動と休憩を繰り返すが、そのサイクルについては20日の記述が参考となる。概ね1時間程度移動し、20～40分程度休憩するという形が基本のようである。但し、鏡から武佐への徒歩による移動の例のように移動時間がやや長い場合もある。また、休憩時間についても見世物などを饗応されて2時間程度休憩している場合もある<sup>16)</sup>。御昼休のタイミングは5日間で一定していない。出発時間が早ければ御昼休も早くなるかというところもいえない。20日と21日は本陣からの出発時間はほぼ同じだが、御昼休の時間は大きくずれている。特に21日の長浜本陣での御昼休の時間(午前8時5分前)は、現代人の感覚から大きく逸脱していて興味深い。御昼休後も移動と休憩を繰り返し、やがて宿入となる。19日の宿入の時間はやや遅く午後7時55分、20日については午後5時14分となっている。21日、22日については宿入の時刻の記述がないのだが、他の事例でみると速見(速水)ー木本間、および板取ー今庄間の移動時間は、およそ2時間弱で移動しているので、順当に考えれば21日は速見村茶屋で30分程度休憩し、午後2時頃に木本本陣へ宿入、22日は板取本陣で30分程度休憩し、午後5時頃に今庄本陣へ宿入したと推測できる。19日、20日については御夜詰引(御夜詰役が退出すること)も定時法で記述されて

表2 1864(元治元)年4月19~23日 京都から福井への移動の時間経過

日	午前/ 午後	時刻	場所	出発/ 到着	内容
19日 晴	午前	暁七時 (2時30分~3時13分)	岡崎屋敷		御供揃
		六半時式寸五分 (5時33分頃)	〃	発	御発駕
		6時37分	蹴上茶屋	着	小休
		8時03分	奴茶屋	着	小休
		9時42分	大津駅	着	御昼休
	午後	12時43分	今井村	着	小休、途中で石山寺へ立ち寄る
		4時56分	草津本陣	着	小休
		7時55分	守山本陣	着	宿入、御浴湯、御膳
		9時06分	〃		御夜詰引
20日 晴	午前	七時	〃		御目覚
		六時 (3時56分~5時13分)	〃		御供揃
		4時35分	〃	発	御発駕
		5時35分余	桜狭茶屋	着	小休
		5時50分	〃	発	
		6時40分	鏡	着	小休
		7時30分	〃	発	鏡から武佐駅まで徒歩で移動
		9時59分(※1)	武佐駅	着	小休
		9時22分	〃	発	
	午後	10時30分	清水鼻村茶屋	着	小休
		11時44分	〃	発	
		12時49分	越知川本陣	着	御昼休
		12時48分(※2)	〃	発	
		1時52分	四十九院唯念寺	着	小休
		2時20分	〃	発	
		3時09分	高宮本陣	着	小休
		3時45分	〃	発	
5時14分	鳥居本	着	宿入		
7時00分	〃		御夜詰引		
21日	午前	七時	〃		御目覚
		六時	〃		御供揃
		4時46分	〃	発	御発駕
		5時55分	米原	着	小休、米原から碓村まで徒歩で移動、そのあとは駕籠で移動
		8時05分前	長浜本陣	着	御昼休
	11時20分前	速見村茶屋	着	小休	
	午後	(時刻不明)	木本駅	着	宿入(この日に木本駅宿入の記述はなし、翌日の記述から)
8時40分		〃		御夜詰引	
22日	午前	七ツ時	〃		御目覚
		六ツ時	〃		御供揃
		4時50分	〃	発	御発駕
		6時52分	柳ヶ瀬本陣	着	小休
		9時52分	椿井峠茶屋	着	小休
		11時08分	中河内	着	御昼休
	午後	11時40分	〃	発	
		12時45分	栃木峠茶屋	着	
		2時20分	板取本陣	着	
(時刻不明)	今庄	着	宿入(この日に今庄駅宿入の記述はなし、翌日の記述から)		
23日 晴	午前	八時一寸前(1時頃)	〃		御目覚
		八時 (1時47分~2時30分)	〃		御供揃
		2時45分	〃	発	御発駕
		3時30分	鯖波	着	小休
		6時55分	松森茶屋	着	小休
		8時21分	白鬼女川		御渡
		9時19分	水落本陣	着	
		10時15分	〃	発	御昼休、水落本陣から御座所玄関まで馬で移動
	午後	2時10分	御座所	着	

※1 誤記と考えられる。他の事例でみると鏡-武佐間の移動は1時間半程度要しており、8時の誤記と考えると辻褄があう。  
 ※2 誤記と考えられる。他の事例でみると越知川-四十九院間の移動は45分から1時間15分程度要している。12時48分のこの部分が誤記なのかは判別できない。

おり、それぞれ午後7時、午後8時40分となっている。

出発から宿入までの時間は、19日が約14時間、20日が約12時間半、21・22日は宿入時間不明のため未詳、23日は約9時間半となっている。京都から福井の移動に要した日数は4日半程度である。後述する他の事例と照らし合わせるとほぼ平均的な日数と考えてよいだろう。

### 3. その他の京都－福井間移動の事例

表3～6は、御用日記に記述された慶応2～3年の京都－福井間移動（表1の事例5、11～13）の時間経過を示したものである。ここでは先にみた表2も含めて相互に比較しながら、概要を把握したい。

#### (1) 京都から福井への移動

1866(慶応2)年10月1～6日(事例11)と1867(慶応3)年8月6～9日(事例12)の移動を表3、4にそれぞれまとめた。まず、表3について見ていくと、元治元年の移動(表2)と比較して移動経路はほぼ一致している、しかし日数は1日長い。今庄までの行程で既に1日の差がついている。これは、移動1日目に守山ではなく草津に宿入したことや、御発駕の時間も午前6時代と元治元年の移動よりも遅いことが起因している。全体としてゆっくりとした行程だったようだ。

表4については、本稿で取り上げた京都－福井間移動の事例の中で最短日数である。移動日数は実質3日程度である。時間短縮の最大の要因は、大津長浜間の水路利用である<sup>17)</sup>。これにより元治元年の移動時には、京都から長浜まで約2日半度要していたものが約1日に短縮されている。

また、初日を除いて御発駕の時間は早く、宿入の時間は遅い。このような効率的な移動も移動日数短縮に貢献している。なお、最終日の今庄出発の時刻は記述されていないものの、脇本着は午前3時21分と記述されている。後掲の表5、6では今庄－脇本間は、休憩なしでも2時間半程度要していることを考えると午前1時前後には今庄を出発していたことが推測できる。

表2～4を通じていえることだが、京都から福井への移動の最終日の出発時間は、かなりの早朝となっていることが多い<sup>18)</sup>。必然的に福井到着も正午から午後2時前後と早い時間帯となるが、これは福井到着後にこなさなければならない諸行事を見越してのことではないだろうか。

#### (2) 福井から京都への移動

1866(慶応2)年6月25～29日(事例5)と1867(慶応3)年11月2～8日(事例13)の移動を表5、6にそれぞれまとめた。両方とも元治元年の移動と比較してほぼ逆の移動経路となっている。但し、表5では、曾根村、長沢村福田寺といった場所での小休が見られる。このときの小休については、「長浜駅迄之間長丁場且大暑ニ付御供頭願出俄ニ左之通御小休被仰付…」と説明されている。大暑(盛夏の猛暑)を理由とした予定にない小休だったようである。

表6を見ると、実質6日半と今回の事例の中で最も移動にかかる日数が長い。理由の1つは今庄までの日数が長いことである。今庄までは通常1日(実質的な行動時間でいえば半日)の行程だが、このときは初冬の悪天候(2日:雨、3日:雷鳴雨雪)が影響したのか、2日間要している。2日の府

表3 1866(慶応2)年10月1~6日 京都から福井への移動の時間経過

日	午前/午後	時刻	場所(内容)	出発/到着
1日 曇↓晴	午前	五時前 (6時31分~7時30分)	岡崎屋敷(御供揃)	
		8時26分	〃(御発駕)	発
		9時40分	奴茶屋(小休)	着
		10時30分	〃	発
		11時23分	大津(御昼)	着
		2時14分	鳥居川村(小休)	発
2日 晴	午前	4時23分	草津本陣(宿入)	着
		5時42分	〃(御夜詰引)	
		切六時 (5時32分頃)	〃(御目覚)	
		六時 (5時32分~6時31分)	〃(御供揃、御発駕)	発
		8時14分	守山本陣(小休)	発
		9時31分	篠原村(小休)	着
3日 晴	午前	9時39分	〃	発
		10時31分	鏡村(小休)	着
		10時49分	〃	発
		12時27分	武佐本陣(御昼)	着
		1時27分	〃	発
		2時40分	清水鼻村(小休)	着
	午後	3時01分	〃	発
		4時03分	越知川本陣(宿入)	着
		切六時	〃(御目覚)	
		六時	〃(御供揃)	
4日 晴	午前	6時20分	〃(御発駕)	発
		7時06分	四十九院村唯念寺(小休)	着
		7時49分	〃	発
		8時59分	高宮本陣(小休)	着
		9時28分	〃	発
		10時48分	鳥居本陣(御昼)	着
	午後	11時55分	〃	発
		12時26分	望湖堂	着
		12時50分	〃	発
		1時23分	米原本陣(小休)	着
		2時05分	〃	発
		(時刻不明)	長浜本陣(宿入)	着
5日 雨↓雨風	午前	切六時	〃(御目覚)	
		六時	〃(御供揃)	
		6時30分	〃(御発駕)	発
		8時45分	速見村(小休)	着
		9時10分	〃	発
		10時56分	木本本陣(御昼)	着
	午後	11時50分	〃	発
		1時16分	中郷(小休)	着
		1時40分	〃	発
		2時51分	柳ヶ瀬(宿入)	着
6日 晴	午前	切六時	〃(御目覚)	
		六時	〃(御供揃)	
		6時18分	〃(御発駕)	発
		8時24分	椿井峠茶屋(小休)	着
		8時47分	〃	発
		9時32分	中河内本陣(御昼)	着
	午後	10時13分	〃	発
		11時19分	栃木峠茶屋(小休)	着
		11時40分	〃	発
		12時34分	板取(小休)	着
		1時00分	〃	発
		3時01分	今庄本陣(宿入)	着
7日 晴	午前	七時 (3時30分~4時31分)	〃(御供揃)	
		4時00分	〃(御発駕)	発
		5時43分	鯖波本陣(小休)	着
		6時01分	〃	発
		8時01分	松森茶屋(小休)	着
		8時28分	〃	発
	午後	11時15分	水落本陣(小休)	着
		11時35分	〃	発
		12時46分	浅水本陣(御昼)	着
		1時34分	〃	発
七時前 (2時21分~3時20分)	御座所	着		

表4 1867(慶応3)年8月6~9日 京都から福井への移動の時間経過

日	午前/午後	時刻	場所(内容)	出発/到着	
6日 晴	午前	正午	岡崎屋敷(御発駕)	発	
		12時40分	蹴上茶屋(小休)	着	
		1時07分	〃	発	
		1時55分	豆茶屋(小休)	着	
		2時21分	〃	発	
		(時刻不明)	大津本陣	着	
7日 晴	午後	6時24分	〃	発	
		6時45分	〃波止場(御出船)	発	
		午前	11時11分	長浜本陣(御昼)	着
		午後	2時59分	酢村茶屋(小休)	着
		4時28分	速見村(小休)	着	
		6時26分	木本本陣(宿入)	着	
8日 晴	午前	4時35分	〃(御発駕)	発	
		5時50分	中郷(小休)	着	
		6時10分	〃	発	
		7時19分	梁ヶ瀬本陣(小休)	着	
		7時50分	〃	発	
		9時30分	椿井茶屋(小休)	着	
	午後	10時06分	〃	発	
		10時54分	中河内(御昼)	着	
		11時40分	〃	発	
		12時39分	栃木峠茶屋(小休)	着	
		1時00分	〃	発	
		1時52分	板取宿(小休)	着	
9日	午前	2時24分	〃	発	
		3時16分	孫谷村(小休)	着	
		3時52分	〃	発	
		5時01分	今庄本陣(宿入)	着	
		3時21分	脇本(小休)	着	
		3時53分	〃	発	
	午後	5時07分	松森茶屋(小休)	着	
		5時40分	〃	発	
		6時46分	水落本陣(御昼)	着	
		7時38分	〃	発	
九時半一寸廻り (0時55分頃)	着城	着			

表 5 1866(慶応2) 年6月25~29日 福井から京都への移動の時間経過

日	午前/午後	時刻	場所 (内容)	出発/到着
25日	午前	六時半前 (4時17分~5時32分)	御座所 (御供揃)	
		6時47分	〃 御庭口から三ノ丸へ	発
		7時15分	〃 (御発駕)	発
		9時29分	浅水本陣	着
		11時03分	水落本陣 (御昼)	着
		12時15分	〃	発
	午後	2時45分	松森茶屋 (小休)	着
		3時08分	〃	発
		4時21分	脇本本陣 (小休)	着
		4時49分	〃	発
		6時18分	湯尾稲荷社	着
		6時28分	〃	発
7時14分	今庄本陣 (宿入)	着		
26日	午前	切六時 (4時17分頃)	〃 (御目覚)	
		六時 (4時17分~5時32分)	〃 (御供揃)	
		六時過、5時7分 (※1)	〃 (御発駕)	発
		7時23分	板取	着
		7時52分	〃	発
		9時00分	栃木峠 (小休)	着
	午後	9時36分	〃	発
		10時38分	中河内本陣 (御昼) (※2)	着
		12時45分	〃	発
		12時60分	椿井峠茶屋	着
		1時15分	〃	発
		3時14分	柳ヶ瀬本陣	着
27日	午前	4時02分	〃	発
		5時10分	中郷 (小休)	着
		5時39分	〃	発
		6時55分	木本本陣 (宿入)	着
		五時尅寸前 (8時40分頃)	〃 (御夜詰引)	
		切六時	〃 (御目覚)	
	午後	六時	〃 (御供揃)	
		5時00分	〃 (御発駕)	発
		6時47分	速水村 (小休)	着
		7時11分	〃	発
		8時29分	曾根村 (小休) (※3)	着
		9時01分	〃	発
28日	午前	10時06分	長浜本陣 (御昼)	着
		11時11分	〃	発
		12時23分	長沢村福田寺 (小休) (※3)	着
		1時03分	〃	発
		2時28分	米原本陣 (小休)	着
		3時13分	〃	発
	午後	4時08分	鳥居本本陣 (小休)	着
		(時刻不明)	高宮駅 (宿入)	着
		六時半■寸五分廻り (※4)	〃 (御夜詰引)	
		切六時	〃 (御目覚)	
		六時	〃 (御供揃)	
		4時45分	〃 (御発駕)	発
29日	午前	5時42分	四十九院村雄念寺 (小休)	着
		6時17分	〃	発
		7時33分	越知川本陣 (小休)	着
		8時10分	〃	発
		9時23分	清水鼻村 (小休)	着
		9時45分	〃	発
	午後	10時55分	武佐本陣 (御昼)	着
		12時00分	〃	発
		1時37分	鏡村 (小休)	着
		2時02分	〃	発
		3時02分	篠原村	着
		3時35分	〃	発
29日	午後	4時45分	守山本陣	着
		4時25分 (※5)	〃	発
		6時45分	草津本陣 (宿入)	着
		四時へ尅寸前 (10時10分頃)	御夜詰引	
	午前	切六時	〃 (御目覚)	
		六時	〃 (御供揃、御発駕)	発
		7時14分	(場所不明) (小休)	着
		9時27分	大津本陣 (御昼)	着
午後	11時26分	〃	発	
	1時59分	奴茶屋 (小休)	着	
	2時39分	〃	発	
	3時15分	蹴上茶屋	着	
4時23分 (※6)	〃	発		
4時23分 (※7)	岡崎屋敷	着		

表 6 1867(慶応3) 年11月2~8日 福井から京都への移動の時間経過

日	午前/午後	時刻	場所 (内容)	出発/到着
2日	午前	9時28分	御座所 (御発駕)	発
		12時30分	水落本陣 (御昼)	着
		1時28分	〃	発
		3時30分	府中本陣 (宿入)	着
		9時00分	〃 (御夜詰引)	
		10時07分	脇本本陣 (小休)	着
	午後	10時47分	〃	発
		12時26分	湯尾	着
		12時41分	〃	発
		1時45分	今庄本陣 (宿入)	着
		8時00分	〃 (御夜詰引)	
		5時00分	〃 (御目覚)	
3日	午前	6時10分	〃 (御立)	発
		7時33分	孫谷村 (小休)	着
		8時46分	板取本陣	着
		10時10分	栃木嶺茶屋	着
		10時27分	〃	発
		12時30分	中河内本陣	着
	午後	1時25分	〃	発
		1時16分	椿井峠茶屋	着
		4時01分	柳ヶ瀬本陣	着
		4時23分	〃	発
		5時37分	中郷茶屋	着
		6時57分	木本本陣 (宿入)	着
4日	午前	9時58分	〃 (御夜詰引)	
		7時00分	〃 (御目覚)	
		8時35分	〃 (御立)	発
		(時刻不明)	速水村 (小休)	着
		11時35分	酢村 (小休)	着
		12時05分	〃	発
	午後	1時59分	長浜本陣 (宿入)	着
		七半時 (3時14分~4時09分)	〃 (御膳)	
		六半時 (5時04分~6時09分)	〃 (清涼寺方丈と面会)	
		9時15分	〃 (御夜詰引)	
		6時20分	〃 (御目覚)	
		7時21分	〃 (御立)	
5日	午前	8時29分	碓村 (小休)	着
		8時56分	〃	発
		9時54分	米原本陣	着
		10時24分	〃	発
		11時13分	鳥本本陣	着
		11時45分	〃	発
	午後	1時08分	高宮本陣	着
		1時53分	〃	発
		2時08分	四十九院村唯念寺 (小休)	着
		3時13分	〃	発
		4時13分	越知川本陣 (宿入)	着
		(時刻不明)	〃 (御目覚)	
6日	午前	(時刻不明)	〃 (御立)	発
		(時刻不明)	清水ヶ原村 (小休)	着
		(時刻不明)	〃	発
		(時刻不明)	武佐本陣	着
		(時刻不明)	〃	発
		(時刻不明)	守山本陣	着
	午後	(時刻不明)	〃	発
		(時刻不明)	鏡村	着
		(時刻不明)	〃	発
		(時刻不明)	草津本陣 (宿入)	着
		4時12分	〃 (御夜詰引)	
		9時23分	〃 (御目覚)	
7日	不明	(時刻不明)	〃 (御立)	発
		(時刻不明)	鳥井川	着
		(時刻不明)	〃	発
		(時刻不明)	大津	着
		(時刻不明)	〃	発
		(時刻不明)	奴茶屋	着
	午後	(時刻不明)	〃	発
		(時刻不明)	蹴上茶屋	着
		(時刻不明)	〃	発
		(時刻不明)	岡崎屋敷	着
		2時13分	〃	発
		2時13分	〃	着

※1 不定時法の時刻と定時法の時刻が両方記述されている。  
 ※2 原文では栃木峠 (小休) よりもこちらの方が先に記述されている。  
 ※3 小休の理由は「大暑二付御供頭願出…」と記述されている。  
 ※4 ■は虫食のため読解できない。暮六半時は午後8時~8時45分。  
 ※5 誤記と考えられる。守山本陣到着と出発が時刻が逆と考えると辻褄があう。  
 ※6 誤記と考えられる。  
 ※7 6月29日の岡崎屋敷到着後の記述に「…京都岡崎御屋敷江御着八時被遊…」とあるので検討が必要。

中、3日の今庄の宿入の時間も非常に早い。表5での大暑を理由とした小休とも共通するが、このような季節的な事情は、移動時間や日数の増減に大きな影響を与えている。

もう1つの理由として、5日の出発から宿入までの時間が非常に短いことがあげられる。午前8時35分に木本を出発し、午後1時59分に長浜に宿入している。この夜に清凉寺方丈と面会するためだが移動は約半日で終了している。

時間の話からは逸脱してしまうが、春嶽は京都-福井間移動で東近江路を多く利用していることが表2～6を見てわかる。御用日記には記述されていない1863(文久3)年10月13～18日(福井→京都)、1867(慶応3)年4月12～16日(福井→京都)についても同様である。例外は1863(文久3)年3月21～24日の京都から福井への移動である。このときだけ西近江路を利用している<sup>19)</sup>。どのような経路やタイムスケジュールだったのか興味がつきないが、確認できる資料は今のところ見いだせていない。

### まとめにかえて

定時法で記述された箇所注目したことで、多くは移動中という限定的な状況ながら、現代人の時間感覚で春嶽の行動を捉えることができたのではないだろうか。また、本陣や各村間の到着・出発時間が定時法記述により詳細に判明することは、当時の京都-福井間の移動の概要を掴む一助になると考えられる。

御用日記のうち1867(慶応3)年1月～同4年7月分については、翻刻されたものが福井県文書館WEB上で「御側向頭取御用日記 データセット」として公開されている<sup>20)</sup>。デジタル化された資料は、今回のような抽出作業に適しており、大変役立った。今後も順次公開予定なので幕末の福井藩関係で研究を志向されている方にぜひ活用をおすすめしたい。

今回は、御用日記における定時法での記述の抽出のみに終始したので、春嶽あるいは側向頭取が御用日記に記述した時刻を具体的にどのように知ったか(自身が時計を持って常に時間を意識していたのか、あるいはタイムキーパー的な役職のものがいたのか)についてまでは論究することができなかった。これについては御用日記の草稿となった鈴木主税の御用日記<sup>21)</sup>では「時計役」という記述が見られる。また1855(安政2)年に春嶽により江戸で取り立てられた時計師、大野規周<sup>22)</sup>が、御用日記をはじめとする諸資料にみられる定時法での記述にどのように関与していたかなども興味深い。それらについては今後の検討課題としていきたい。

### 注

- 1) 福井県立図書館保管松平文庫「御側向頭取御用日記(1)～(16)」(1859(安政6)年1月～1868(明治元)年7月)(福井県立図書館分類番号705(仮94)、福井県文書館資料番号A0143-00511～00526・複製本番号A3842～A3879)。
- 2) 1844(天保15)年から1873(明治6)年に太陽暦が施行されるまでの29年間利用された太陰太陽暦。天保暦以前の暦(貞享暦、宝暦暦、寛政暦)はいずれも暦面で定時法が用いられていたが、一般社会では不定時法が用いられることが多かった。そのため暦面の時刻と実用の時刻とが異なり、両者の時刻の対応表が数多く作られたが、この不便を緩和することはできなかった。結局、実用の時刻(不定時法)が勝る形で、江戸時代最後の暦法である天保暦では、暦面に記入する時刻も全て不定時法を使用することになった(橋本万平「暦に見られる定時法」



- 『日本の時刻制度 増補版』1994年 p 120～131参照)。
- 3) 一日を昼と夜に分け、それぞれを等分に分割する方法。日の出と日の入を明け六つ暮れ六つとし、昼夜の基準とする。春分・秋分では昼・夜はほぼ等しく、夏は昼間の時刻の間隔は長くなり冬はその逆となる。
  - 4) 一昼夜を均等に等分して時刻を定める方法。四季昼夜を通じて、すべての時刻の間隔は同一の長さに設定される。
  - 5) 前掲『日本の時刻制度 増補版』 p170参照。
  - 6) 春嶽公記念文庫名品図録刊行会『春嶽公記念文庫名品図録』1983年 p180～182、338～340参照。
  - 7) 1873(明治6)年1月1日、太陰暦から太陽暦への改暦に伴い、時刻制度は不定時法から定時法が採用されることになる。当時の布告は以下のとおり(古事類苑刊行会「方技部暦道下」『古事類苑』1908年-1930年 p430参照)。  
「一、時刻之儀、是迄昼夜長短ニ随ヒ十二時ニ相分チ候処、今後改テ時辰儀時刻昼夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ、午前幾時ト称シ、午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ午後幾時ト称候事  
一、時鐘之儀来ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事、但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱来候処以後何時ト可唱事」
  - 8) 不定時法の時刻から現代時刻への変換は、前掲『日本の時刻制度 増補版』の、「第三章 江戸時代以降の時刻制度」第十三表時刻対照表、および「第二十一項 尺寸分で示す時刻表現法」を参考にした。尺時計による表記(○寸○分)以外は時間帯での表記とした。なお、尺寸分で示す時刻表現において、橋本の考え(半時=五寸)と、春嶽が編集した「幕儀参考稿本」(松平春嶽全集編纂刊行会『松平春嶽全集(1)』所収)での幕府の時計の基準(半時=一尺)に相違があるが、本稿では後者に依拠した。
  - 9) 藩政を知るための基礎的資料である家譜では「十月朔日四時為御上坂御発駕」と記述されており、本来は上坂を目的としていた移動だった(福井県文書館資料叢書6『越前松平家家譜 慶永3』2011年 p261参照)。
  - 10) 今庄滞在の理由については、10月1日の記述で「明六時御供揃ニ而当駅御立可被遊之所、御風氣被為在候ニ付当宿御逗留被遊候(読点は引用者が追加)」とある。
  - 11) 1865(慶応元)年9月5日に春嶽が東郷筋へ出かけた際の御用日記の記述は以下のとおり。  
「一、五時之御供揃ニ而東郷御立山江御野廻り之趣を以茸狩ニ被為入、左之面々御供ニ被召連、御山ニ而御小弁当被召上、其節於御前腰兵糧御相伴被仰付、御家老高知御中老御用人外金兵衛仲庵同断、夫々山所々御廻り被遊、七時比御供揃被仰出、夫々御帰り道南山普門寺江御立寄宝物等御覽被遊、以思召御立山の本多興之輔方本多修理方酒井十之丞江御鉄炮拝借雁打被仰付、新開筋へ被遣候、被為入懸小稲津地之上ニ而雁御寄セ有之御一発被遊、板垣地之上本多修理方酒井十之丞江も御道筋御脇筒被仰付  
御道筋  
南御門の勝見御定道、河原口の板垣御渡川、同村中下馬小稲津六条、東郷中島中脇村の御登山被遊、御帰殿懸南山普門寺へ御立寄、夫々元之御道通り御帰殿被遊候  
(中略)  
一、御出殿五時式寸五分、御帰殿六半時壹寸五分前(読点および波線は引用者が追加)」
  - 12) 前掲『日本の時刻制度 増補版』 p170参照。
  - 13) 1862(文久2)～1868(明治元)年における春嶽の遠距離移動について御用日記に記述されていないのは以下の4つ。①1863(文久3)年1月23～2月3日(江戸→京都)、②同年3月21～24日(京都→福井)、③同年10月13～18日(福井→京都)、④1867(慶応3)年4月12～16日(福井→京都)。このうち①は「南海航行掌記」(前掲『松平春嶽全集(4)』所収)、③は「登京日記」(『春嶽遺稿』巻2所収)、④は「登(滞)京日記」(『福井市史』資料編5所収)において、それぞれ定時法での記述が確認できる。
  - 14) 前掲『春嶽遺稿』巻2所収。
  - 15) 同上。
  - 16) 1866(慶応2)年6月29日の御用日記に「一、右御休中此節大津駅ニ於て見セ物ニいたし居候虎并象藤五郎奉入御覽度願出右両様御覽被遊」と記述されているように春嶽は大津滞在時に矢嶋藤五郎(大津町惣年寄)から饗応を受けており、2時間程度大津に滞在している。
  - 17) 水路利用については、1867(慶応3)年8月6日の御用日記に「今般御渡船一条ニ付而ハ矢島藤五郎不容易骨

折」とあるように、矢嶋藤五郎の尽力があつて成立したことで、春嶽もその労に報いている。また、操船にあつた彦根水主組に対しても鯛や酒が与えられているが、その理由として「徹夜休息之間も無之骨折候二付」と説明されている。夜通し休息なしでの航行だったようである。

- 18) 今庄出発が早朝になることは、春嶽の若年時代の参勤交代時（1844(天保15)年4月29日～5月11日）にもみられる。このときの移動最終日、11日の今庄出発時間は夜九時（午前0時頃）となっている（堀井雅弘「松平春嶽の紀行文「東海紀行」」『福井県文書館紀要』14、2017年）。
- 19) 前掲『越前松平家家譜 慶永3』p230参照。
- 20) 「御側向頭取御用日記 データセット」（<http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/05/2018goyounikki.html>）。URLは2019年3月時点のもの。
- 21) 柳沢美美子「鈴木主税の弘化四年「御用日記」」『福井県文書館研究紀要』12、2015年 p46参照。
- 22) 大野 規周（おおの のりちか、1820(文政3)年－1886(明治19)年）は、江戸時代後期の時計師、造幣寮技師。江戸神田で家業の時計師を営み、1855(安政2)年、福井藩に召し抱えられ、その後幕府海軍の下オランダに留学し、帰国後大阪造幣寮で技官を務めた。詳しくは平成30年度文書館企画展示「発掘！明治を拓いた意外な福井藩士たち」（会期：2018年8月24日（金）～10月24日（水）、会場：福井県文書館 閲覧室 <http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/08/m-exhbt/20180823AM/20180823AM.html>）。URLは2019年3月時点のもの。